

## 書 評

**Alfred Bohner, David C. Moreton (hg.),**  
***Wallfahrt zu Zweien: Die 88 Heiligen Stätten von Shikoku***

Bremen: Europäischer Hochschulverlag, 2010, 287S. EUR 39.90. (①)

(アルフレート・ボーナー著, デイビット・モートン編『同行二人—四国八十八か所』)

**Alfred Bohner, Katharine Merrill (tr.), David C. Moreton (ed.),**  
***Two on a Pilgrimage: The 88 Holy Places of Shikoku***

Bremen: Outlook Verlagsgesellschaft, 2011, 333pp. EUR 39.90. (②)

(アルフレート・ボーナー著, キャサリン・メリル訳, デイビット・モートン編  
『同行二人—四国八十八か所』)

日本の巡礼に関する外国人の著作は、普通、外国語で公刊されるという言語の障壁によって、巡礼研究者も含めて、日本ではあまり知られていない。評者は従来からこの点を憂慮し、外国人研究者の書物を紹介したことがある<sup>1)</sup>。本稿も、同じ関心から本の紹介と拙評を記すものである。

対象とする2冊は、第二次世界大戦前にドイツ語で出版された四国遍路についての本を最近復刻したもの(①)とその英訳本(②)である。ドイツ語の原著は、ドイツ東洋文化研究協会紀要の別冊第12号として1931年に東京で刊行されたものである<sup>2)</sup>。これを復刻したのが①である。②は原著の英訳本である。以下、ドイツ語の原著を「ドイツ語原本」、リプリント版の①を「ドイツ語復刻版」、英訳本の②を「英訳版」と呼ぶことにする。「本書」と記す場合は、「ドイツ語復刻版」と「英訳版」の両方を指すものとする。

まず、著者アルフレート・ボーナー (Alfred Bohner)<sup>3)</sup> に触れておく。ボーナーについては、

編者デイビット・モートン (David C. Moreton)<sup>4)</sup> が、編者序論の中で彼のプロフィールを紹介している。また、編者は以前にも日本語の報告<sup>5)</sup> をしている。ここでは、これらによりながら簡単な紹介のみしておく、ボーナーは1894年の生まれで、1922年春に来日し、1928年3月まで滞在して、松山高等学校でドイツ語と音楽を教えたという。1927年7月～8月に四国遍路を行い、同年秋に東京のドイツ東洋文化研究協会で講演して、四国遍路の経験や研究を出版するよう勧められ、帰国後に原稿を仕上げ出版されたのがドイツ語原本である。1940年には、ドイツ語原本は博士学位論文としてボン大学に提出される。戦後はドイツの学校で教鞭をとり、1954年に亡くなったという。

ドイツ語原本の構成は、「はしがき」「目次」「序論」「本論」「結論」「付録」「写真付録」の順で、ページの大半を占める「本論」は、A「遍路の歴史」、B「寺院」、C「遍路者」<sup>6)</sup>、D「道中で」の4章からなる。

「序論」では、日本の仏教巡礼の歴史が概説

される。とくに西国三十三か所の重要性が述べられるが、その意義は歴史的側面にあり、今日の人々の生活にとっては四国遍路がより重要で、何百年もの間、毎年何万人という日本人が遍路をし、沿道の人々から接待を受けていると指摘される。

「本論」のA「遍路の歴史」は3節に分かれる。I節「弘法大師、精神的創始者」では、四国遍路の創始者と考えられている空海（弘法大師）の生涯をスケッチした後、伝承の面ではキリストの一生と多くの類似点があること、しかし、真言を唱える祈りや護摩修行からは空海が日本密教の創設者であることを確認できること、神道との対応を図ったこと、呪術者の要素があること、空海の影響力が今も生きていることなどが述べられる。II節「遍路の起源」では、真念著『四国徧礼功德記』（元禄3年）の所説を紹介し、役小角や修験道が遍路の発展には重要であったとする。III節「遍路の呼称、最古の記録と本、旅の記述」（英訳版は「呼称」（Bezeichnung）をcharacteristicsと訳すが、どうであろうか）では、景浦直孝の議論によりながら、「遍路」の呼称の変遷が述べられ、本川村地蔵堂の文明3年の鰐口、53番札所円明寺の慶安3年の納札、『四国辺路道指南』などの案内記、菅菊<sup>かん</sup>太郎などの遍路記が紹介される。

B「寺院」も3節からなる。I節「数と四つの国への配置、四つの信仰段階」では、88の数字の由来や、阿波・土佐・伊予・讃岐の四つの国の性格などが述べられる。阿波と讃岐は主な札所を番号順にガイド風に紹介するだけだが、土佐の項では、道が悪く険しいことだけでなく、人々が遍路に対して冷淡であることが自分の経験も踏まえて詳説される。一方、伊予では人々が優しく、弘法大師伝説もそれに対応していると述べる。II節「レイアウト、宗派別配置、本尊」ではまず、道標や寺院境内の建物・施設（門・手水鉢・本堂・大師堂・鐘楼・塔・

経蔵など）が概説される。本堂の屋根の様式にも注目している。また、宗派では真言宗が大部分であること、本尊は観音菩薩（山岳寺院では十一面観音または千手観音）と薬師如来が多く、真言宗で重要な大日如来は少ないことが指摘される。III節「八十八か所寺院における両部神道」では、神仏習合の様相を寺院の鳥居や神道の札所名で確認し、該当する札所について個々に述べている。

C「遍路者」は2節からなる。I節「遍路の動機」では、結婚前の若い人の遍路や極楽往生を願う老人の遍路もあるが、病気治癒を求める場合が多いことがまず述べられ、実際に治った例がいくつか挙げられる。また、病気が治ったり災難から助かったりしたお礼参りも多いこと、他の人のための代参や亡くなった父母の冥福を祈る遍路もあることが記される。そして、最後に、人生がうまくいかない時に遍路に出かけることも多いとし、自分の経験や見聞から、四国遍路が娯楽目的の旅ではないことを強調している。II節「装備」では、古い時代と執筆当時の装束を概観した後、白衣、菅笠、背中の荷物（荷行李）とその中身、頭陀袋、履物（草鞋と地下足袋）、杖、納札、札挟みなどについて述べられる。納札の由来と関連して、右衛門三郎の伝説も紹介する。笠や杖・納札・札挟みに記す文字、杖・納札の使い方、古い時代からの変化など、かなり細かいことにまで触れている。近世の案内書の図版に出ている遍路の装束をよく見ていることには感心させられる。また、荷行李や油紙（雨具）、草鞋から地下足袋への移行など、ドイツ語原本が書かれた昭和初期の時代を感じさせて興味深い。

D「道中で」は11の節からなる。I節「旅立ちと出発点」（英訳版は「旅立ち」（Abreise）をtimeと訳す）は、遍路をどこから始めるかが居住地別に述べられ、昔（おそらく近世）の状況を付記し、船が早朝、撫養に着いてから遍路

を始めるまでの様子を描く。II節「遍路規則」では、第1番札所靈山寺で遍路に渡される「遍路規則」が翻訳・紹介されている。現代から見れば、昭和初期の史料として貴重であろう。III節「読経」では、遍路が唱える15の文言（祈念文、懺悔文から回向文まで）の漢字部分が翻訳されている。また、新旧のいくつかの経本を比べて、細かな違いを見出している。IV節「納経」では、納経の意味と納経所での納経の手順が述べられる。V節「接待と修行」では、「接待」の語源や内容が考察された後、接待に似た「修行」（戸口で読経して施しを乞う行為）について説明される。そして、修行に関連して「常習者」（当時の言い方。英訳版では「professional pilgrim」と訳す）にページをさき、遍路初心者に修行の仕方を教えるが、詐欺をはたらくこともあると述べる。ここでは、著者自身が「常習者」と同宿した時の体験が詳述されており、読者を引き込む。VII節の木賃宿の例にもなっている。VI節「徒歩旅行」では、遍路の日数・費用、回数の多い人、利用可能な乗り物について述べられる。また、歩き遍路は約7割とされている。VII節「木賃宿」では、大部分の遍路が泊まる木賃宿の料金や食事、布団、虫（シラミ・ノミなど）について述べた後、著者が最初に木賃宿に泊まった時の経験が8ページにわたって具体的に描写されている<sup>7)</sup>。木賃宿の常識（浴衣や茶碗・箸の持参など。しかし、現代人には常識ではない）を知らずに困惑した著者の失敗談も含まれ、本書の中で、読んで最も面白い部分になっている。VIII節「断食」は、タイトルとは異なって、食事の「精進」についてである。とくに、禁酒と、「胡麻酢」と称して酒を飲む便法に触れるが、大多数の遍路は規則を守っていると述べる。また、権力と金が遍路の妨げになるとされる一証左として、住友銀行創立者である住友吉左衛門（小田注：15代か）の遍路譚を紹介している。IX節「女性の遍路」

では、女性の遍路は普通であることや、女人禁制の名残が一部の札所に残っていることなどが述べられる。X節「ご詠歌」では、詠歌の説明がされ、西国三十三観音霊場の詠歌がモデルになっていることを指摘するとともに、著者が見学した詠歌大会の様子が描写される。XI節「奉納絵馬、護符、薬、厄除け」は、雑多な内容である。絵画以外のさまざまな奉納物がまず紹介され、切断した指が奉納されているのを見た時のことを驚きとともに記す。また、草鞋の奉納に関連して、第42番札所仏木寺牛王堂への牛の草鞋の奉納や牛守護の護符が紹介される。第35番札所清瀧寺の病気封じの行事（小田注：茄子加持か）について懐疑的に述べた後、石鎚権現の護符などに触れ、安産のお守りに関連して、子安大師で知られる第61番札所香園寺のここ15年の発展を説明する。そして、厄除けのご利益をうたう寺院の代表例として第23番札所薬王寺を取り上げ、パンフレットの引用により、厄除けの具体的手順を示す。最後に、厄除け大師像の多さに見られるように、日本の民衆信仰において弘法大師が重要であることを示唆する。なお、タイトルにある「薬」は内容を反映していない。

「結論」では、他の巡礼とは違う四国遍路の特徴とは何かと自問し、どの巡礼にも見られる教育的意義については、いわゆる旅のもたらすものだけでなく、接待における思いやりを挙げる。経済的意義については、少なく見積もっても30～60万円のお金を四国外からの遍路が四国に落としていくことや、全国からの寄付があることなどの経済効果を指摘する。宗教的意義に関しては、他の巡礼も信心を深める宗教経験であるが、四国遍路は娯楽の要素がない点においてその意義が大きいと述べる。そして、民衆信仰の次元では、キリスト教におけるイエスのような仲介者の役割を弘法大師が果たしているとし、真言の教えが、本来の性格とは逆に、他

力救済の宗教に変わっていると主張する。この変化をもたらした大きな要因が四国遍路であるというのである。この後に、宗教経験が分かる例として、僧侶の小林<sup>しょうせい</sup>正盛による「私の再生」の文章を引用する。

「付録」は、A「八十八か所寺院リスト」、B「遍路に関連する、あるいは遍路者によってしばしば使われる表現と慣用句のリスト」、C「二つの往来手形」、D「文献紹介」、E「四国の地図」（ドイツ語復刻版236頁と目次では見出しが欠落）からなる。Bは遍路用語集とも言うべきもので、口語や会話の文章も含まれ、当時の遍路習俗が分かって、実に興味深い。Cは、著者所蔵の往来手形2通の翻訳である（ひとつは文政6年、伊予国喜多郡新谷村（現大洲市）のもの、もうひとつは文化9年、伊予国温泉郡立花村（現松山市）のものである）。Dは参考文献リストである。

最後の「写真付録」には、95枚の図版が収められている（図版番号は88までだが、枝番号を持つものがある）。本文中で個々に言及されているわけではないが、本文の記述とある程度対応した配列順序になっている。これらのうち77枚は、著者が遍路の途中で撮影した札所や沿道風景などの写真である。いずれも昭和初期の貴重な記録だが、中でも目を奪われるのは、数は少ないが遍路姿の人物写真で、そのうちの1枚（図62）は本書の表紙も飾っている。写真の他には、納経帳や納札などの図版が掲載されている。

以上、紹介してきたように、本書は、単なる日記風の記録やエッセイではなく、四国遍路の多様な側面について、非常に幅広く検討した研究書とすることができる。幅広いということは、逆に見れば総花的で、結論に至る論理にきれいさがないのであるが、ここでは、評者のような、ある分野の専門研究者が陥りがちな関心や視野の狭さがなく、多分野の人に様々な示唆

を与えてくれると肯定的にとらえたい。本書は、真念の著作のような近世の資料も含め、日本語を中心とする多くの文献と直接の見聞（著者は日本語が堪能であったようである）、それに著者自身の遍路経験をもとにし、分析や思索を積み重ねてまとめられている。時折見られるキリスト教やヨーロッパとの比較も、ドイツ人ならではである。とはいえ、本書で最も読みごたえがあるのは、やはり著者の個人的体験がリアルに描かれているところである。既に言及したように、長い記述は、「常習者」との同宿（D章V節）、初めての木賃宿宿泊（D章VII節）、詠歌大会の見学（D章X節）の3箇所ある。とくに前二者は、昭和初期の遍路の実態がありありと伝わってくる。また、付録に挙げられている遍路用語集や写真も、当時の遍路習俗を記録した大変貴重なものと言える。ドイツ語や英語が読めなくても、この用語集や写真を見るだけでも、本書は手にとる価値がある。

次に、復刻と翻訳についてコメントしておきたい。編者モートンの「はしがき」に記されているように、ドイツ語復刻版・英訳版<sup>8)</sup>の出版に至る経緯は非常に込み入っており、注に回すが<sup>9)</sup>、自身も四国遍路の研究を行っている編者モートンの尽力によるものである。ドイツ語原本は日本国内では稀観書であり<sup>10)</sup>、ドイツ語復刻版や英訳版の出版により、貴重な文献が手軽に読めるようになったのは非常にありがたいことである。とくに英訳版の出版によって、多数の読者がポーターの研究に触れることが可能となり（評者も英訳版によって読了した）、彼の業績が世に知られることになる。

その偉業に感謝しつつも、復刻と翻訳の作業に少し苦言を呈しておきたい。英語が得意ではない評者が述べるのは気がひけるのだが、英訳版の英語は、少し読みにくいのではないかという感じを受ける。語順の不自然さは、ドイツ語の翻訳ゆえに、直訳のようにになっているのかと

も思われるのだが、また、意味が通らない箇所や文法的におかしい箇所も散見される。ドイツ語復刻版と照合すると、英訳が必ずしも正確ではなく、場合によっては訳に欠落があることにも気づく（翻訳者メリルの英訳自体の誤りと、メリルの英訳原稿のPDFファイルを見ながら編者モートンが再入力した時の誤りの両方であろう）。単純なスペルミスも多く（日本語のローマ字表記部分に限らず、たとえばfactとなるべきところをfaceと誤記している）、そのために意味を解せないこともある。英語を第一言語とする編者ならば、もう少し細かいチェックがあってもよかつたのではないかと思われる。

他方、ドイツ語復刻版についても、複製ではなく、あらためて文字入力しているため、スペルの誤りや脱字が見られる。ドイツ語原本と最初の数ページだけ対照してみたが、たとえば、3頁の下から10行目では文頭のSieが落ちているし、下から9行目ではauchのはずがhだけになっている。ドイツ語を日常的に使用する読者ならば、読解に支障はないのかもしれないが、不完全な復刻は残念である。また、版を組み直してページのナンバリングが完全に変わっているのであるから、他のページに言及している場合の当該ページ番号は、ドイツ語原本のままにせず、ドイツ語復刻版の新たなページ番号に修正するくらいの気遣いはほしい。280～283頁（図81～85c）の数箇所、ドイツ語のエスツェット（ß）がベータ（β）で表記されているのも、ドイツの出版社にしては奇異である。もしも可能ならば、英訳版ともども修正版の刊行をお願いしたいところである。

そのような瑕疵はあるにせよ、本書刊行による恩恵は大きく、評者も多くのことを本書から学んだ。拙評をご覧の方には、写真だけでも披見されることをお勧めしたい。

最後に、拙評執筆にあたり、編者のデイビット・モートン氏から関係資料<sup>11)</sup>をお送りいた

だいたことを付記し、ご好意に厚くお礼申し上げます。

## 注

- 1) 小田匡保「一外国人研究者のみた日本の巡礼」、京都民俗14, 1996, 39-52頁。小田匡保「書評：ナタリー・クワメ『日本古文書解読入門—四国遍路史料による』(Nathalie Kouamé, Initiation à la Paléographie Japonaise: à travers les manuscrits du pèlerinage de Shikoku)」, 京都民俗19, 2001, 85-91頁。
- 2) ①や②には、ドイツ語原本が1931年に出版されたことは記されているが、きちんとした書誌データの記載がないのは残念である。ここに付記しておく。Alfred Bohner, *Wallfahrt zu Zweien: Die 88 Heiligen Stätten von Shikoku* (Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens; Supplementband 12), Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1931, 159 p + 50 p.
- 3) 著者のファーストネームを、編者は、たとえば注5) ④で「アルフレッド」と片仮名表記するが、ここでは、ドイツ語の通常の読み方である「アルフレート」と記しておく。なお、著者自身は、納札に「アルフレード・ボーネル」と自分の名前を書いている（本書の口絵写真と写真付録の図85c）。「ボーネル」は、末尾のrを強調した古い日本語表記である。
- 4) 編者の名前の片仮名表記は本人が自身のウェブサイト (<http://www.davidmoreton.com>) などで使用しているものに従った。
- 5) ①デイビット・モートン「昭和初期の外国人遍路：アルフレッド・ボーナー」（「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会事務局編『2009年度 四国遍路と

世界の巡礼 国際シンポジウム プロシーディングズ』, 2010) 79-87頁。編者以外に, ②井上純一「三人のボーネル兄弟の日本: 牧師館の子 Hermann Bohner (2)」, 「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究7, 2009, 53-74頁 ([http://koki.o.oo7.jp/09.12.22\\_inoue.htm](http://koki.o.oo7.jp/09.12.22_inoue.htm)に掲載) などにも紹介がある。

- 6) よく知られているように, 日本語の「遍路」には遍路の行為そのものと遍路をする人の二つの意味があるが, ドイツ語・英語では表現は別である。章のタイトルのように, ただの「遍路」だけでは, どちらの意味か文脈で判断できない場合は, 後者を「遍路者」と表記することにする。
- 7) 注5) ②井上論文に, この部分の抄訳がある。
- 8) ドイツ語復刻版は, ドイツ語原本の内容の手前に, 編者の付け加えた部分がある。冒頭の「編者注」では, 書名が「同行二人」の翻訳であると記され, 次いで編者の「はしがき」「序論」, 口絵写真がある。「序論」で著者ボーナーのプロフィールが紹介されていることは, 本文で述べたとおりである。英訳版は, 「編者注」や「はしがき」「序論」, 口絵写真の内容がドイツ語復刻版と多少違っている。「序論」では, ボーナー自身の遍路を編者モートンが検討した文章が付け加えられているほか, 口絵写真に, ボーナーが着用したと思われる朱印の押された白衣のカラー写真が追加されているのが目をひく。また英訳版は, ボーナーの「はしがき」の前にモートンの「編者注」とドイツ語原本表紙(これはドイツ語復刻版には収められていない)の英訳が, 「はしがき」と「目次」の間に翻訳者キャサリン・メリル(Katharine Merrill)の「訳者注」が入っている。なお, ドイツ語復刻版, 英訳版ともに, 冒頭に書誌事項を記し

た①②以外に, いくつかの版が出ていて状況が複雑である。版元のヨーロッパ大学出版社のサイト (<http://eh-verlag.de/index.php>) やいくつかのオンライン書店の情報から判断すると, ドイツ語復刻版は, 2010年11月にヨーロッパ大学出版社から①(ISBN: 9783867416030) が出版され(表紙の色は青), 次いで2011年5月に, アウトルック出版社から緑色の表紙の同じ本(ISBN: 9783864030055) が出された。その後10月に, ヨーロッパ大学出版社から同じ緑色の表紙で第2版(ISBN: 9783867417549) が出ている。第2版は, カバーや奥付がわずかに変わっているものの, ページ数は同じで, スペリングの誤りも修正されていないようである。英訳版は, 2011年7月にアウトルック社から②(ISBN: 9783864030383) が出て, 10月に今度はヨーロッパ大学出版社の版(ISBN: 9783867417556) が出ている。表紙はともに朱色である。なお, ヨーロッパ大学出版社とアウトルック出版社はブレーメンの同じ住所に所在しており, 密接な関係があると思われるが, 詳細は不明である。アウトルック出版社のウェブサイトは確認することができなかった。

- 9) ドイツ語復刻版・英訳版にある編者モートンの「はしがき」などから簡単にまとめておく。モートンは, 1999年, カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で四国遍路に関する修士論文に取り組んでいる時に, ボーナーのドイツ語原本と未刊の英訳の存在を知り, ドイツ語原本は目にするが, 英訳にはたどり着けなかった。2001年から徳島文理大学客員講師として日本に滞在し, 2006年に四国遍路に来たスイス人夫婦と会ってボーナーの話をしたところ, 彼らがボーナーの娘ハンナを見つけ出し, それ以来, 彼女と連絡を取り合うようになって

た。2009年秋に愛媛大学で開かれた「四国遍路と世界の巡礼」のシンポジウムでボーナーについて報告し、聴衆からドイツ語原本の再版と未刊の英訳の探索・出版を勧められる。その結果、ドイツ語復刻版①が2010年に刊行される。未刊の英訳については、オリヴァー・スタットラー (Oliver Statler) の著書で言及されていることを手がかりに、ハワイ大学マノア校所蔵のスタットラー・コレクションからメリルによる英訳の写しを見つける。これが、2011年に英訳版②として出版される。英訳版に付されたメリルの「訳者注」によれば、ボーナーとメリルは1924～1927年の間、松山での知り合いで、ドイツ語原本が出版された後、英訳の許可とともに、ボーナーが本をメリルに送ってきたという。彼女は1924～1941年、松山東雲高等女学校で教鞭をとっており、英訳は1941年に完成しているが、刊行はされなかった。英訳の写しがスタットラー・コレクションにある理由については、2010年秋にコレクション中の書簡を調査したモートンによると、スタットラーは1971年に四国遍路をしている時に、偶然、松山でメリルに会い、メリルに英訳を貸してくれるよう頼んだと推測されるという。その英訳をコピーしたものがスタットラー・コレクションに残されているということである。

- 10) 国立情報学研究所のWebcat (2013年度よりCiNii Booksに移行) によれば、ドイツ語原本は国内では、国際交流基金情報セン

ターライブラリー、京都大学法学部図書室(2冊)、東京大学総合図書館、国立民族学博物館に所蔵されているだけである。

- 11) 『へんろ』第331号 (伊予鉄不動産「へんろ」編集部、2011年10月発行) に、英訳版の紹介記事が出ていることもご教示いただき、お送りいただいた。

## 付 記

本稿は、元来、京都民俗学会の『京都民俗』第29号に投稿したものであるが、規定の字数を大幅に超過したため、『京都民俗』では短縮版を掲載することになった (小田匡保「アルフレート・ボーナー著、ディビット・モートン編『同行二人—四国八十八か所』」, 京都民俗29, 2012, 83-88頁)。当初の原稿を一部加筆修正したものが本稿である。

なお、『京都民俗』の原稿を提出した後に、ドイツ語からの邦訳が、大法輪閣より『同行二人の遍路』として出版された (アルフレート・ボーナー著、佐藤久光・米田俊秀訳『同行二人の遍路—四国八十八ヶ所霊場』大法輪閣, 2012)。ただし、AのI節「弘法大師、精神的創始者」とBのIII節「八十八か所寺院における両部神道」の訳が省略されており、掲載された写真も半分以下である。また、長い解説があるものの、本稿で紹介したドイツ語復刻版や英訳版にはまったく触れられていない。誤訳や訳文のぎこちなさも散見されるが、まずは、ボーナーの研究が日本語で読めるようになったことを喜んでおきたい。

(小田匡保: 駒澤大学)